

各関係機関団体の長 } 殿
各病虫害防除員 }

福岡県農林業総合試験場長
(福岡県病虫害防除所)

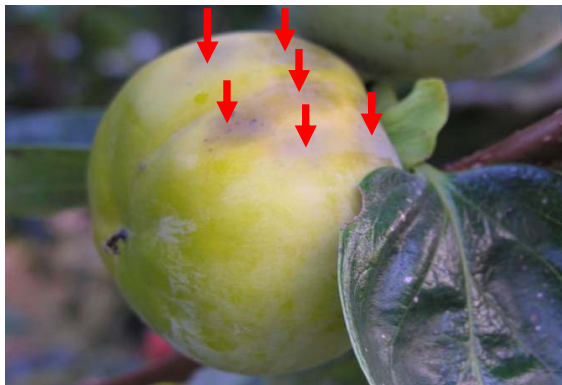
平成28年度病虫害発生予報第6号(9月)について

このことについて、病虫害発生予報第6号を発表したので送付します。

予報第6号

果樹カメムシ類の局所的な飛来に注意を!

本年の果樹カメムシ類発生量は多くありませんが、油断は禁物です。
県下の一部地域で、果樹カメムシ類の飛来により局所的な被害が発生しています。
果樹カメムシ類のヒノキ山林からの離脱予想時期は8月下旬~9月上旬頃で、地域によっては既に離脱していると思われます。
広域に移動するので飛来が一段落したと思われる地域でも、予察灯のデータや果樹園内での発生状況を把握し、適宜防除して下さい。



果樹カメムシ類によるカキの被害
(矢印は吸汁された部分)



カキ果実を吸汁するチャバネアオカメムシ

<予想される向こう1か月の天候(平成28年9月3日~平成28年10月2日)>

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。
向こう1か月の平均気温は平年より高く、降水量は平年より多く、日照時間は平年並か少ないでしょう。
週別の気温は、1~4週目まで平年より高いでしょう。

向こう1か月の気温・降水量・日照時間(数値は予想される出現確率)

	平均気温	降水量	日照時間
九州北部地方	低10 並30 高60% 高い見込み	少20 並30 多50% 多い見込み	少40 並40 多20% 平年並か少ない見込み

(福岡管区气象台 平成28年9月1日発表抜粋)

9月における主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

主な病害虫の発生予報概要

作物名	病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (9月の発生予報)	
		平年比	平年比	前年比
水稲	いもち病	少	やや少	少
	紋枯病	少	やや少	やや少
	トビイロウンカ	少	少	多
	コブノメイガ	少	少	少
	斑点米カメムシ類	少	やや少	やや少
大豆	ハスモンヨトウ	並	並	多
	吸実性カメムシ類	少	並	並
カンキツ	黒点病	やや少	並	多
	ミカンハダニ	やや多	並	やや多
カキ	炭疽病	並	やや多	やや多
	フジコナカイガラムシ	やや多	やや多	少
果樹共通	チャバネアオカメムシ	並	—	やや多
茶	炭疽病	少	少	少
	カンザワハダニ	並	並	並
冬春イチゴ (育苗期)	炭疽病	並	やや多	やや多
	ハダニ類	並	並	並

*果樹共通・チャバネアオカメムシの平年比について、現況は年次変動が大きいいため前年比としている

作物別発生予報

注1) 予報の発生量は平年（福岡県の過去10年間）及び参考として前年との比較で、「少、やや少、並、やや多、多」の5段階で示しています。

注2) 予報の根拠には、巡回調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生状況、気象予報からみた病害虫の発生条件を必要に応じて記載しています。それぞれの条件は、少発生（－）、やや少発生（－～±）、並発生（±）、やや多発生（±～＋）、多発生（＋）として示し、＋－を総合的に判断して発生量を予想しています。

【普通作物：水稲】

普通期水稲

1 いもち病（葉いもち・穂いもち）

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年より少

(2) 予報の根拠

ア 8月5半月調査の結果、発生量は平年より少なかった（－）。

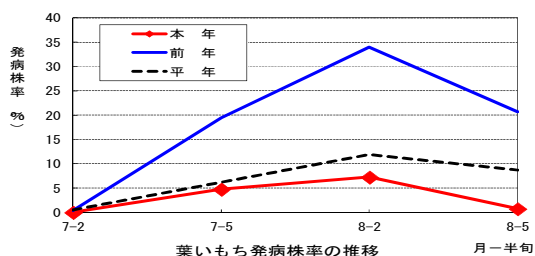
（葉いもち）発病株率 0.8%（平年 8.7%、前年 20.7%）

発生ほ場率 32.6%（平年 41.3%、前年 78.3%）

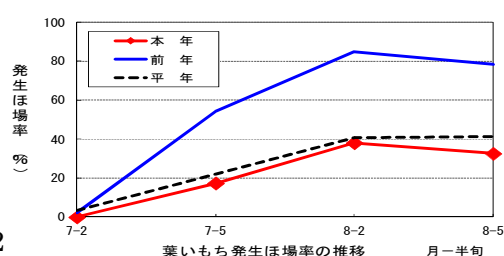
発生状況は停滞型である。

（穂いもち）発病穂率 0.01%（平年 0.02%、前年 0.02%）

（調査ほ場 46 ほ場中、20 ほ場の夢つくし、元気つくしの結果）



2



イ 向こう1か月の気象予報では、少発生の条件となっている（－）。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 葉いもちが発生しているほ場では、薬剤防除を徹底するとともに、適切な肥培管理に努める。
- イ 穂いもちに対する薬剤防除を実施する場合、薬剤によって使用時期（収穫前日数）が異なるので使用基準を確認する。
- ウ 粒剤を施用する場合は、散布後7日間止水する。
- エ 使用農薬は「平成28年度普通作病害虫・雑草防除の手引き」を参照する。
- オ **農薬の使用および散布等にあたっては、p14の内容を確認の上、適切に実施する（以下の病害虫についても同様）。**

2 紋枯病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや少

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（－）。

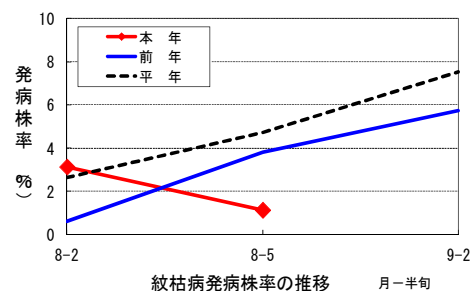
発病株率 1.1%（平年 4.7%、前年 3.8%）

発生ほ場率 17.4%（平年 32.1%、前年 31.1%）

イ 向こう1か月の気象予報では、多発生の条件となっている（＋）。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 出穂期以降も、病斑の上位進展が認められる場合は防除を行う。
- イ 農薬によって使用時期（収穫前日数）が異なるので、使用基準を確認する。
- ウ 粒剤を施用する場合は、散布後7日間止水する。



3 トビイロウンカ

(1) 予報の内容

発生量：平年より少、前年より多

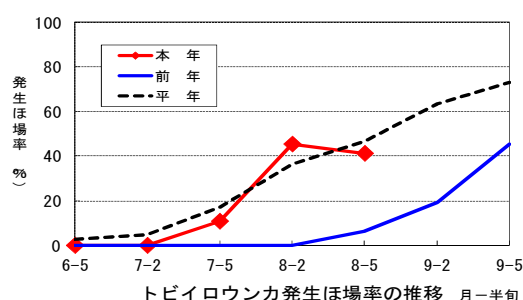
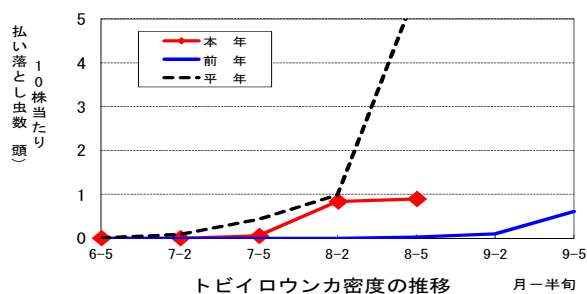
(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（－）。

10株当たり払い落とし成幼虫数 0.90頭（平年 5.62頭、前年 0.02頭）

発生ほ場率 42.6%（平年 46.5%、前年 6.4%）

イ 向こう1か月の気象予報では、多発生の条件となっている（＋）。



(3) 防除上注意すべき事項

ア 本種は発生初期には低密度でも世代を経るごとに急激に増加するので、ほ場での発生状況を必ず確認する。

発生密度が要防除水準を超えたほ場では防除を実施する。

<要防除水準>

飛来後第2世代：100株当たり 100頭以上

飛来後第3世代：100株当たり 1,000頭以上

イ 出穂後は薬剤が株元まで到達しにくくなるため、株元に確実に届くよう注意して散布する。

ウ 薬剤散布に際しては収穫前日数に注意する。

4 コブノメイガ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より少

(2) 予報の根拠

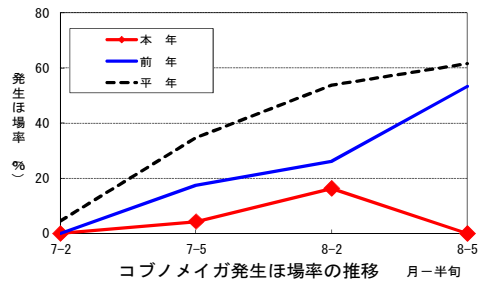
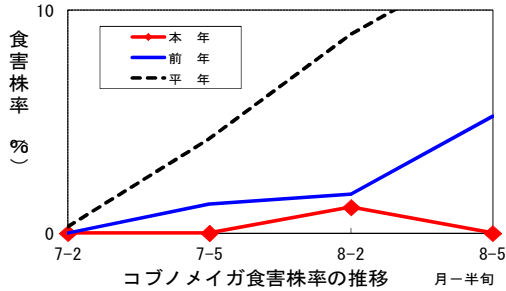
ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった（－）。

食害株率 0%（平年 12.5%、前年 5.2%）

発生ほ場率 0%（平年 61.5%、前年 53.3%）

30㎡当たり払出し成虫数 0.6頭（平年 4.6頭、前年 1.2頭）

イ 向こう1か月の気象予報では、多発生の条件となっている（＋）。



(3) 防除上注意すべき事項

ア 防除適期は、発蛾最盛期から1週間後で、今年は9月10日前後である。

5 斑点米カメムシ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや少

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査（水田内の片振り20回すくい取り）の結果、発生量はアカスジカスミカメは平年よりやや多かったが、主要3種カメムシ、ミナミアオカメムシは平年より少なかった（－～±）。

- ・ミナミアオカメムシ

20回すくい取り虫数 0頭（平年 0.1頭、前年 0頭）

発生ほ場率 0%（平年 3.8%、前年 0%）

- ・主要3種カメムシ（クモリカメムシ、ホハリカメムシ、シラホカメムシ）

20回すくい取り虫数 0.03頭（平年 0.85頭、前年 1.30頭）

発生ほ場率 3.4%（平年 25.2%、前年 50.0%）

- ・アカスジカスミカメ

20回すくい取り虫数 1.9頭（平年 0.8頭、前年 2.6頭）

発生ほ場率 21.6%（平年 22.5%、前年 50.0%）

イ 県下5か所の予察灯における8月1半旬～4半旬の誘殺虫数は、ミナミアオカメムシ、主要3種カメムシ、アカスジカスミカメは平年より少なかった（－）。

- ・ミナミアオカメムシ

12頭（平年 33頭、前年 47頭）

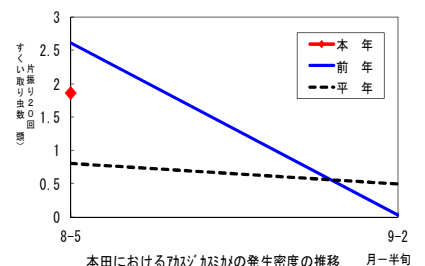
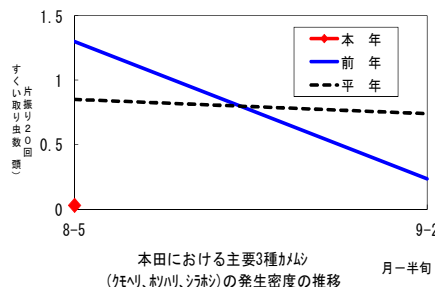
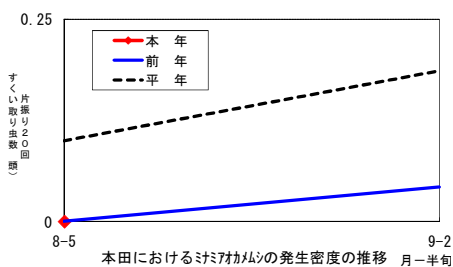
- ・主要3種カメムシ（クモリカメムシ、ホハリカメムシ、シラホカメムシ）

8頭（平年 27頭、前年 16頭）

- ・アカスジカスミカメ

220頭（平年 464頭、前年 827頭）

ウ 向こう1か月の気象予報では、多発生の条件となっている（＋）。



(3) 防除上注意すべき事項

- ア 防除時期は穂揃い7～10日後である。
- イ カメムシ類は広範囲に移動するので、できるだけ広域一斉防除を実施する。
- ウ 防除が実施されたほ場においても、カメムシ類の再飛来には十分注意する。

【普通作物：大豆】

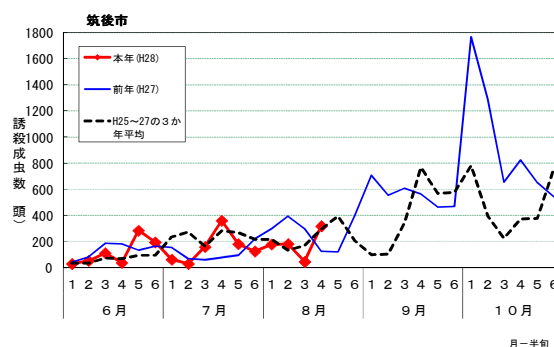
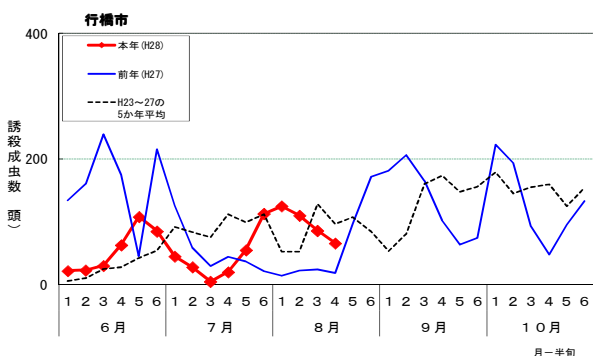
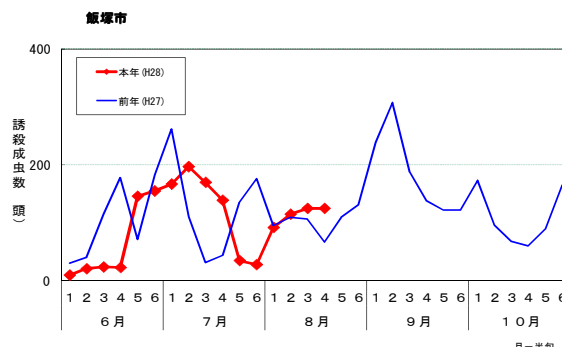
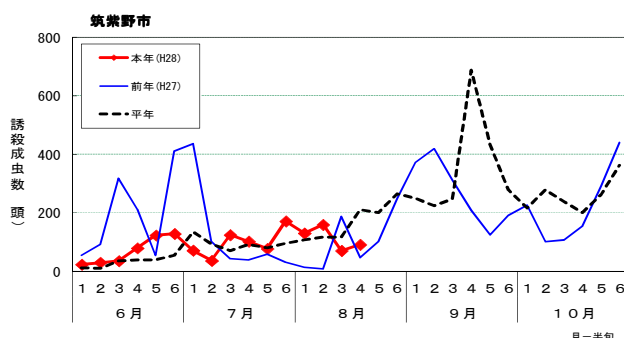
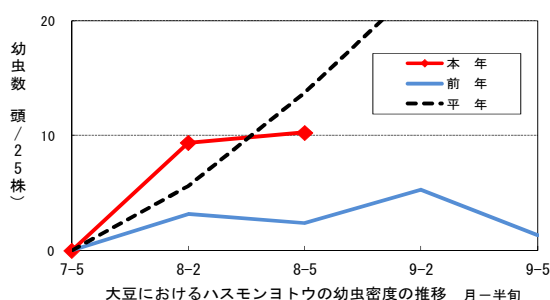
1 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年より多

(2) 予報の根拠

- ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。
25株当たり幼虫数 10.3頭(平年 13.8頭、前年 2.4頭)
発生ほ場率 63.6%(平年 58.7%、前年 36.4%)
- イ 8月1半旬～4半旬のフェロモントラップにおける誘殺虫数は、筑紫野市 450頭(平年 552頭、前年 253頭)であり、平年よりやや少なかった(-～±)。
- ウ 向こう1か月の気象予報では、多発生の条件となっている(+)



フェロモントラップにおけるハスモンヨトウの誘殺虫数

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 分散前の若齢幼虫が群生している白変葉は、見つけ次第除去する。
- イ 薬剤散布は、防除効果が高い若齢幼虫期に実施する。
- ウ 防除適期は、フェロモントラップの誘殺ピークから10日目頃であるが、地域によって誘殺数に差があるため、ほ場で発生状況を必ず確認する。

2 吸実性カメムシ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(－)。

主要3種カメムシ (アカカメムシ、イモンジカメムシ、ホリカメムシ)

25株当たり虫数 0頭 (平年 0.2頭、前年 0頭)

発生ほ場率 0% (平年 9.3%、前年 0%)

ミナミアオカメムシ

25株当たり虫数 0頭 (平年 0.04頭、前年 0頭)

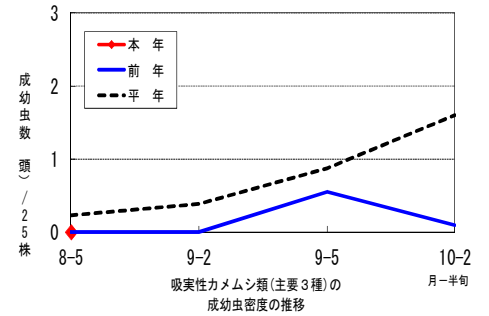
発生ほ場率 0% (平年 1.7%、前年 0%)

イ 向こう1か月の気象予報では、多発生の条件となっている(+)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 防除適期は開花期後30日前後である。多発生の場合は7～10日後にも防除を行う。

イ カメムシ類は広範囲に移動するので、できるだけ広域一斉防除を実施する。



【果樹：かんきつ】

1 黒点病

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年より多

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(－～±)。

発病果率 2.4% (平年 3.4%、前年 0.6%)

発生ほ場率 30.0% (平年 43.6%、前年 27.3%)

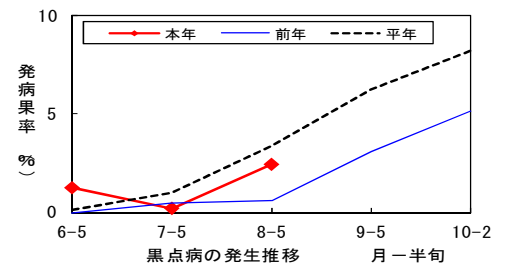
イ 向こう1か月の気象予報では、多発生の条件となっている(+)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 伝染源である枯れ枝は極力除去し、園外に持ち出し処分する。

イ 前回防除後の積算降雨量や散布間隔に応じた適期防除を行う。

ウ 農薬の使用及び散布等にあたっては、p14の内容を確認の上、適切に実施する(以下の病害虫についても同様)。



2 ミカンハダニ

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった(±～+)。

寄生葉率 16.7% (平年 13.8%、前年 4.8%)

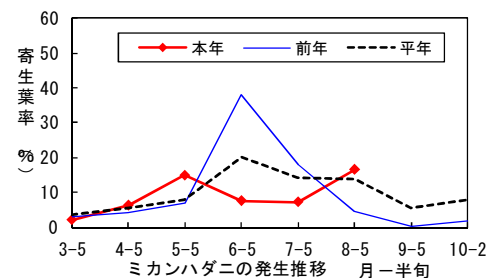
発生ほ場率 90.0% (平年 63.4%、前年 45.5%)

イ 向こう1か月の気象予報では、やや少発生の条件となっている(－～±)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤防除にあたっては、薬液が葉裏に十分かかるよう丁寧に散布する。

イ 薬剤感受性の低下をさけるため、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



【果樹：かき】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

発病枝率 0.1%（平年 0.1%、前年 0%）

発生ほ場率 8.3%（平年 5.9%、前年 0%）

発病果率 0.3%（平年 0.2%、前年 0%）

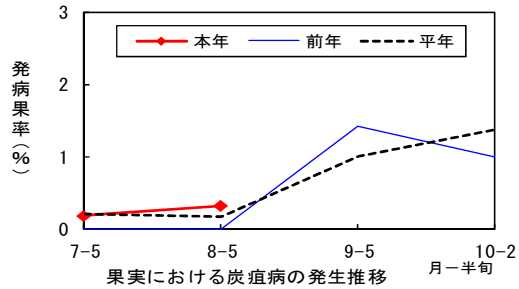
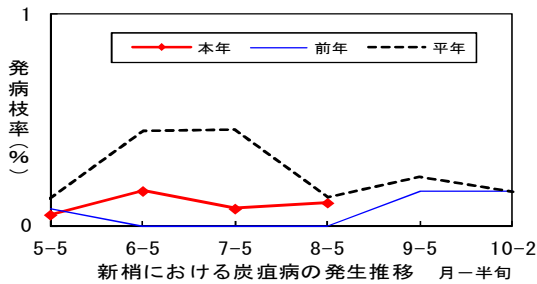
発生ほ場率 18.2%（平年 15.7%、前年 0%）

イ 向こう1か月の気象予報では、多発生の条件となっている（+）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 伝染源となる罹病枝や罹病果は、見つけ次第園外に持ち出し処分する。

イ 連続降雨があった場合や前年の発生が多かった園では、薬剤防除を徹底する。



2 フジコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多、前年より少

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった（±〜+）。

寄生果率 12.7%（平年 10.6%、前年 19.7%）

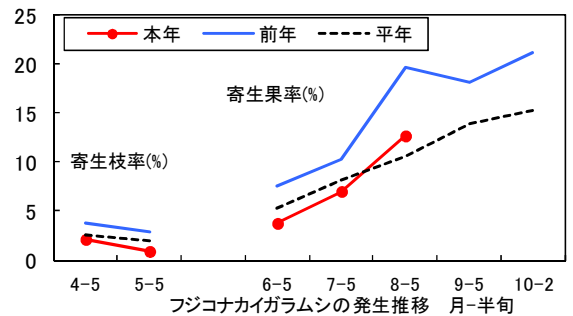
発生ほ場率 91.7%（平年 87.6%、前年 100%）

イ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている（±）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤がかかりにくい部位に寄生しているので、混み合った枝を整理し散布むらがないよう丁寧に散布する。

イ 防除対策の詳細は、県ホームページに掲載している『病害虫・雑草防除の手引き』を参考にしてください。URL：http://www.pref.fukuoka.lg.jp/uploaded/life/203227_51694561_misc.pdf



【果樹共通：チャバネアオカメムシ】

(1) 予報の内容

発生量：前年・前々年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア チャバネアオカメムシの1㎡当たりの越冬量は平均0.8頭（前年0.9頭、前々年4.8頭）で、前年並であった（±）。

チャバネアオカメムシの越冬量およびヒノキ球果着生量の年次推移

	平成28年	平成27年	平成26年
越冬量(頭/㎡)	0.8	0.9	4.8
ヒノキ球果着生量	やや少	やや少	中

イ 8月1半旬～5半旬までのフェロモントラップでのチャバネアオカメムシの誘殺虫数は、前年並であった（±）。

誘殺虫数：19頭（前年 4頭、前々年 6,994頭）（調査地点：筑紫野市）

ウ 8月1半旬～5半旬までの予察灯でのチャバネアオカメムシの誘殺虫数は、前年よりやや多かつ

た(±~+)。

誘殺虫数：2,631頭(前年 310頭、前々年4,665頭)(調査地点：筑紫野市)

710頭(前年 496頭、前々年1,658頭)(調査地点：久留米市)

839頭(前年 186頭、前々年2,558頭)(調査地点：八女市)

エ ヒノキ球果ビーティング調査によるチャバネアオカメムシ類の捕獲虫数は、前年並であった(±)。

捕獲虫数：7.7頭(前年 8.2頭、前々年 5.5頭)

カ 向こう1か月の気象予報では、並発生の条件となっている(±)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発生は地域差が大きく、同一園内でも被害状況が異なるので、特に飛来が毎年ある園は園内を注意して見回り、飛来を認めたら直ちに防除する。

イ 果樹カメムシ類は広範囲に移動するため、薬剤散布は広域一斉防除の効果が高い。

ウ 薬剤防除の際は、収穫前日数等農薬使用基準を遵守する。

エ 降雨があると薬剤の残効が短くなるので、散布間隔に注意する。

オ 今後の発生状況については、病害虫防除所ホームページ(<http://www.jpnp.ne.jp/fukuoka/>)を参照する。

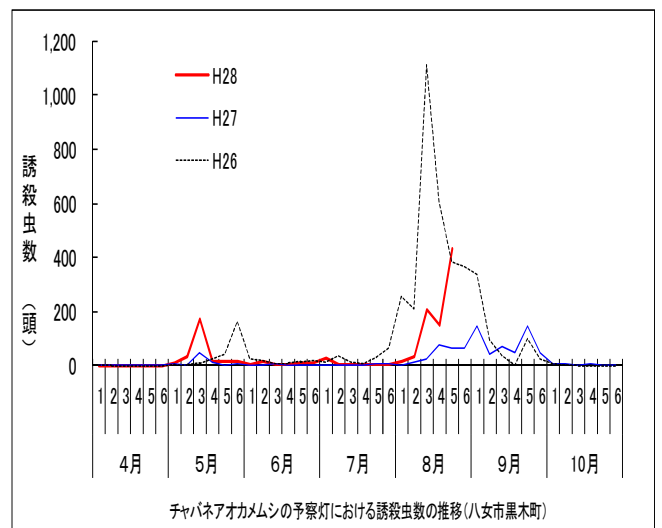
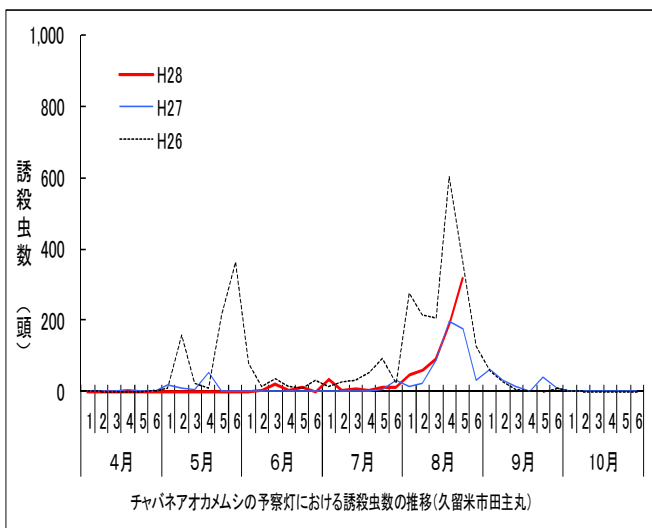
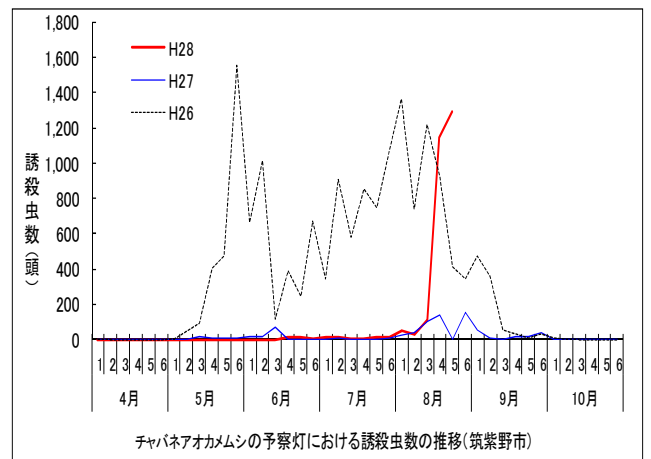
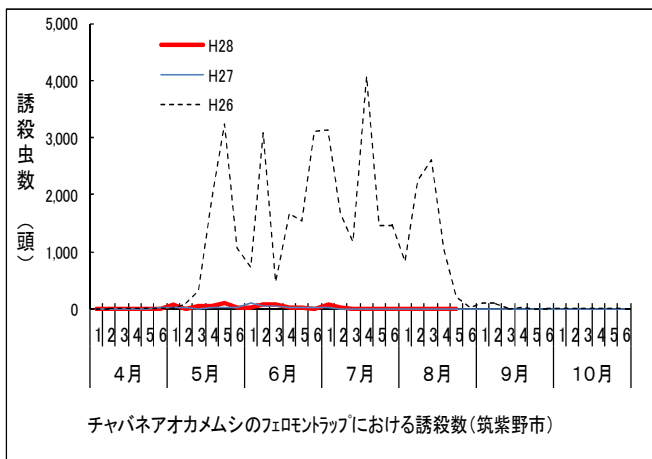


表 ヒノキ球果の口針数及びヒノキ球果ピーティングによるカメムシ類捕獲虫数

調査時期：2016年 8月5半旬

調査場所	口針数調査		ピーティング調査 (頭)														3種の合計			
	ヒノキ球果		チャバネアオカメムシ										ツヤアオカメムシ			クサギカメムシ				
	口針数が認められた球果の割合 (%)	口針数 (本)	成虫数	幼虫数					計	計	幼虫比 (%)	成虫数	幼虫数	計	成虫数	幼虫数		計		
				1令	2令	3令	4令	5令												
福岡・飯塚	筑前町	90	5.3	0	0	0	1	0	2	3	3	100	0	0	0	0	0	0	0	3
	糸島市高祖	70	7.4	0	0	0	0	0	1	1	1	100	1	0	1	0	0	0	2	
	宗像市玉丸	70	3.2	1	0	1	0	0	1	2	3	67	0	1	1	0	0	0	4	
	飯塚市入水	100	31.5	0	1	3	0	0	0	4	4	100	0	0	0	0	0	0	4	
	平均 (4か所)	82.5	11.9	0.3	0.3	1.0	0.3	0	1.0	2.5	2.8	91.7	0	0.3	0.5	0	0	0	3.3	
久留米	久留米市田主丸町森部	100	14.8	2	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	2	
	うきは市吉井町福益	100	26.5	0	10	1	2	0	0	13	13	100	0	0	0	0	0	0	13	
	うきは市吉井町屋部	100	35.4	3	0	4	0	0	0	4	7	57	0	0	0	0	0	0	7	
	平均 (3か所)	100.0	25.6	1.7	3.3	1.7	0.7	0	0	5.7	7.3	52.4	0	0	0	0	0	0	7.3	
朝倉	朝倉市長谷山	95	10.9	15	0	3	0	0	1	4	19	21	0	0	0	0	0	0	19	
	朝倉市榑原	100	14.0	1	0	1	0	0	0	1	2	50	0	0	0	0	0	0	2	
	朝倉市志波	100	21.8	0	5	2	3	0	1	11	11	100	0	0	0	0	0	0	11	
	平均 (3か所)	98.3	15.6	5.3	1.7	2.0	1.0	0	0.7	5.3	10.7	57.0	0	0	0	0	0	0	10.7	
八女	八女市黒木町野田山	100	8.3	2	1	1	0	0	0	2	4	50	0	0	0	0	0	0	4	
	八女市立花町飛形山	100	44.7	0	0	0	0	0	0	0	0	-	0	0	0	0	0	0	0	
	みやま市山川町立山	100	15.2	8	14	11	5	0	0	30	38	79	0	2	2	0	1	1	41	
	平均 (3か所)	100	22.7	3.3	5.0	4.0	1.7	0	0	10.7	14.0	64.5	0	0.7	0.7	0	0	0	15.0	
京葉	みやこ町犀川木山	50	1.7	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	1	1	0	1	3	
	京葉地区	50.0	1.7	1.0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	1	1	0	1	3.0	
	平均 (14か所)	91.1	17.2	2.4	2.2	1.9	0.8	0.0	0.4	5.4	7.7	63.4	0.1	0.3	0.4	0.1	0.1	0.1	8.2	
	H27	87.7	16.1	2.0	1	1.3	1.6	1.1	1.7	6.2	8.2	64.3	0.8	2.2	3.0	0	0	0	11.4	
	H26	99.7	24.9	2.8	0	0.2	0.1	0.6	1.8	2.7	5.5	46.4	1.1	0.5	1.6	0	0	0	7.1	
	H25	83.2	9.6	3.2	0.1	0.6	1.0	0.6	1.0	3.5	6.6	61.3	0.7	0.5	1.2	0.2	0.1	0.4	8.2	

注1) 口針数は20球果を調査し、1球果当たりの平均を記載。
 注2) ピーティング調査は、1地点5枝、1枝当たり5回のたたき落としの結果。
 注3) チャバネアオカメムシの卵から次世代の成虫になるまでの期間は、夏期の気温で約30~40日。
 注4) H27は、チャバネアオカメムシの越冬量がH28と同程度の類似年。

【果樹：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (9月の発生予報)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
かき ハマキムシ類	やや多	やや多	やや多	・ハマキムシ類幼虫は葉と葉が重なった部分や、ヘタと果実の間に多く潜んでいるため、薬剤はかかりムラがないよう十分量を丁寧に散布する。

【茶】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年より少

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年より少なかった(一)。

発病葉数 0.04葉 (平年 1.7葉、前年 3.0葉)

発生ほ場率 11.1% (平年 36.3%、前年 55.6%)

イ 向こう1か月の気象予報では、多発生の条件となっている(+)

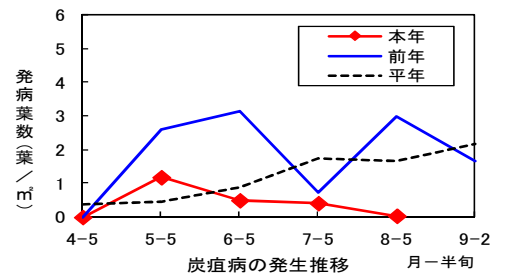
(3) 防除上注意すべき事項

ア 秋芽での発生に注意し、萌芽から1葉期までに防除を行う。

イ 雨滴により胞子が飛散伝搬するので、降雨前に防除を行う。

ウ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

エ 農薬の使用及び散布等にあたっては、p14の内容を確認の上、適切に実施する(以下の病害虫についても同様)。



2 カンザワハダニ

(1) 予報の内容

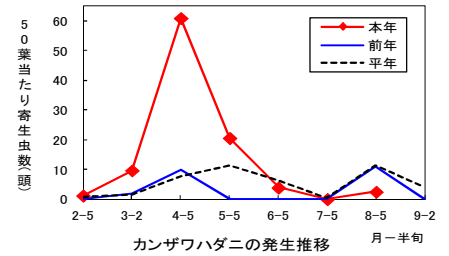
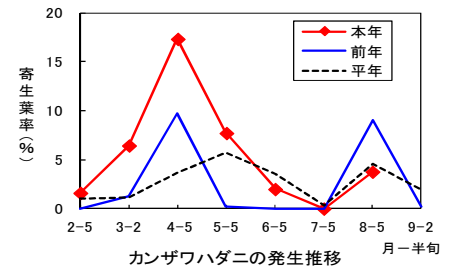
発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

- ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった(±)。
 寄生葉率 3.8% (平年 4.5%、前年 9.0%)
 50葉当たり寄生虫数 2.4頭 (平年 11.4頭、前年 10.8頭)
 発生ほ場率 66.7% (平年 37.5%、前年 60.0%)
- イ 向こう1か月の気象予報では、やや少発生の条件となっている(ー～±)。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 発生状況をよく観察し、寄生葉率が2%以上の場合は防除を行う。
- イ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



【茶：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (9月の発生予報)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
もち病	並	並	並	<ul style="list-style-type: none"> ・秋芽生育期に降雨が多いと、感染、発病しやすくなる。 ・今年多発した園では、萌芽から1葉期までに防除を行う。
チャノキイロアザミウマ	少	少	並	<ul style="list-style-type: none"> ・たたき落とし(B5版上)で10頭以上発生している場合は防除を行う。 ・新芽の萌芽から開葉期を重点に防除する。
チャノミドリヒメヨコバイ	少	少	並	<ul style="list-style-type: none"> ・たたき落とし(B5版上)で4頭以上発生している場合は防除を行う。 ・新芽の萌芽から開葉期を重点に防除する。 ・多発後は防除効果が劣るので、多発する前に防除を行う。
チャノコカクモンハマキ	少	少	並	<ul style="list-style-type: none"> ・第3世代成虫の発蛾最盛期は、9月上～中旬頃と予想されるので、ほ場での成虫の発生に注意し、成虫が最も多いときから7日後を目安に防除を行う。 ・巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が見られたら直ちに防除を行う。
チャノホソガ	並	少	並	<ul style="list-style-type: none"> ・ほ場での成虫の発生に注意し、成虫が最も多いときから7日後を目安に防除を行う。 ・巻葉後は防除効果が劣るため、巻葉が見られたら直ちに防除を行う。
チャトゲコナジラミ	並	並	並	<ul style="list-style-type: none"> ・防除適期は若齢幼虫期で、第3世代幼虫の防除適期は、9月中～下旬と予想される。 ・虫の発生が確認できない園でも、寄生している可能性が高いので防除を行う。 ・幼虫は葉裏に寄生しているので、薬液が葉裏に十分にかかるよう丁寧に散布する。

【野菜：冬春イチゴ（育苗期）】

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

発病株率 0.16%（平年 0.14%、前年 0.16%）

イ 向こう1か月の気象予報では、多発生の条件となっている（+）。

(3) 防除上注意すべき事項

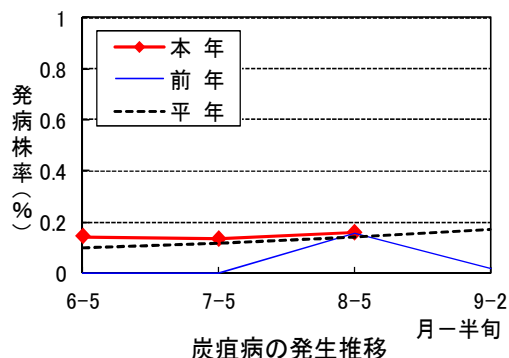
ア 向こう1か月の気象予報では平年より高温・多雨と予想されていることから、今後の発生量の増加が懸念される。罹病苗とその周辺苗は早めに処分し、定期的な薬剤防除を励行する。

イ ビニル及び寒冷紗被覆をしている育苗ほ場では風通しを良くする。

ウ 夜冷短日処理や低温暗黒処理を行う場合は、必ず健全苗を用いる。

エ 定植後の発病株は周囲の土ごと掘り取り、残渣を残さないようにして、ほ場外へ持ち出し処分する。

オ 農薬の使用及び散布等にあたっては、p14の内容を確認の上、適切に実施する（以下の病害虫についても同様）。



2 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 8月5半旬調査の結果、発生量は平年並であった（±）。

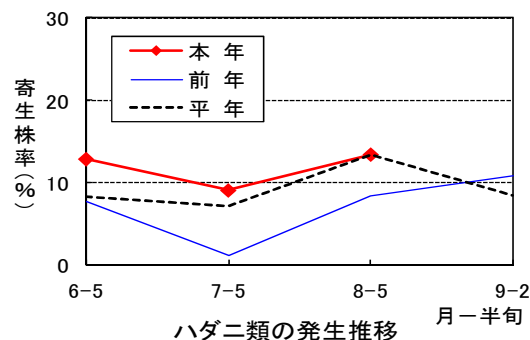
寄生株率 13.4%（平年 13.5%、前年 8.4%）

イ 向こう1か月の気象予報では、やや少発生の条件となっている（-〜±）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 多発後は防除が困難になるので、発生状況に注意し、発生初期の防除を徹底する。

イ 抵抗性がつきやすいので、気門封鎖剤も利用し、同一系統薬剤の連用は避ける。また、葉裏に薬液が十分付着するよう、葉かぎ後に防除を行う。

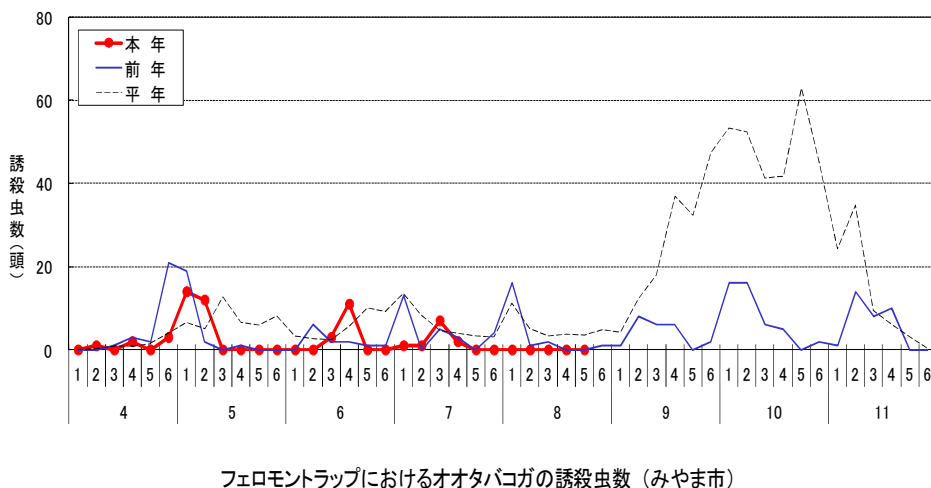
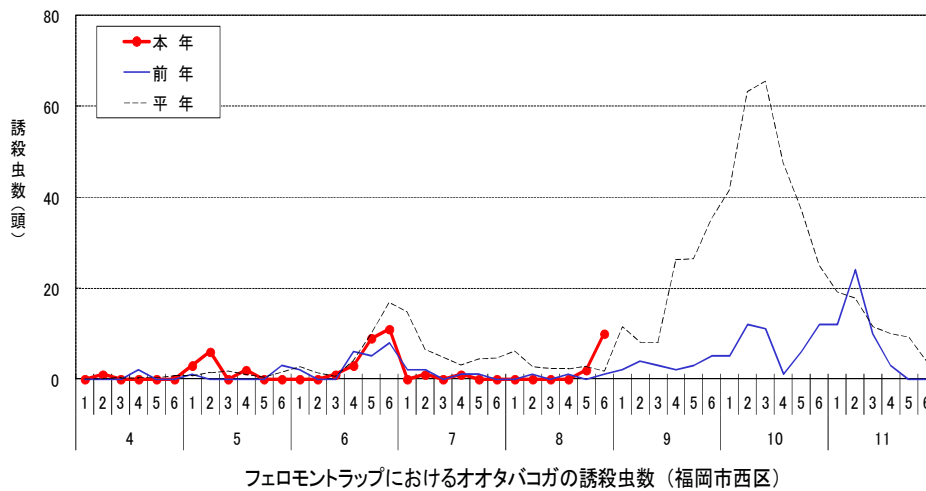


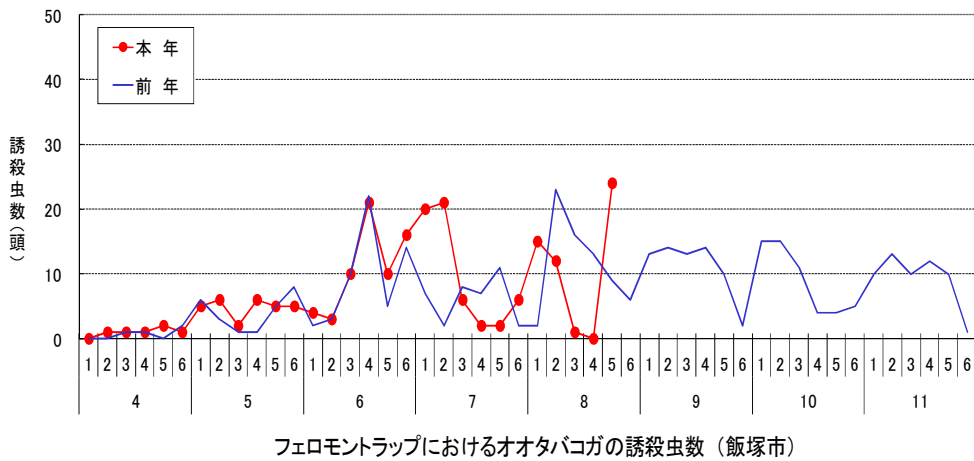
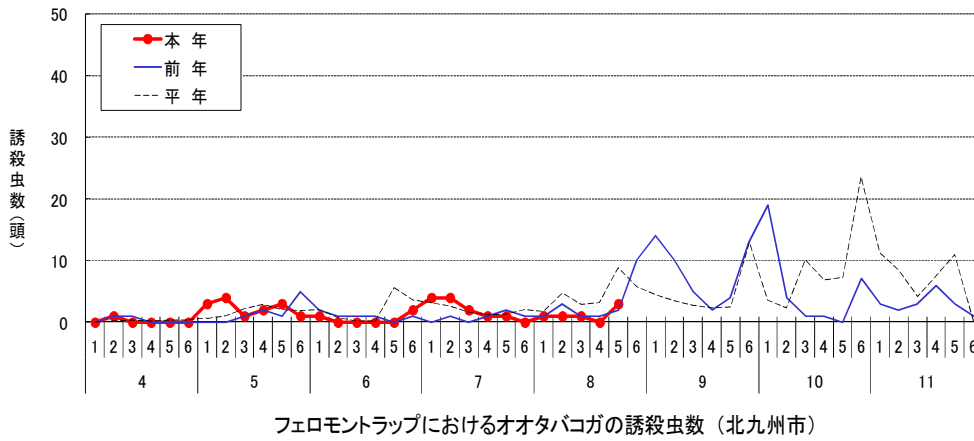
詳しくは平成28年8月24日付け28農林試第2597号技術情報第9号参照。

【野菜：その他の病害虫】

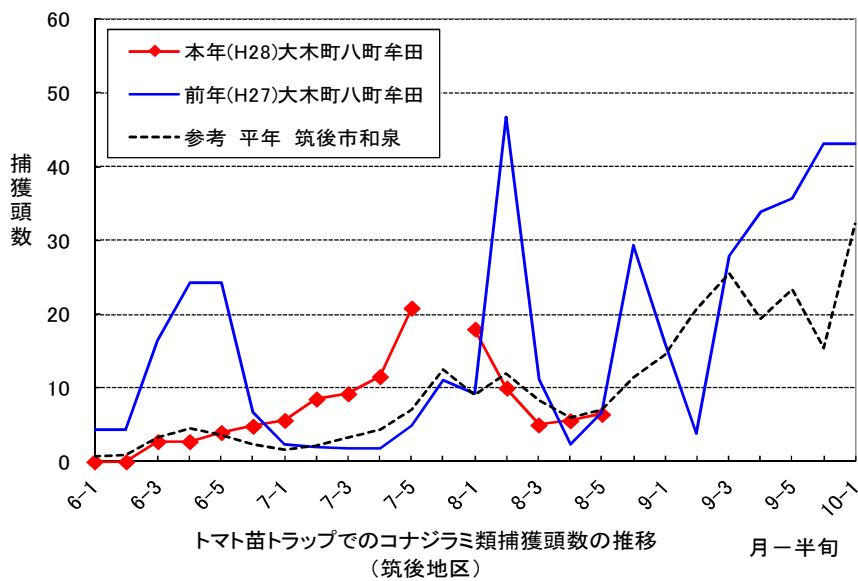
作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (9月の発生予報)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
野菜共通				
オオタバコガ	並	やや多	やや多	<ul style="list-style-type: none"> 8月のトラップへの誘殺数は非常に少なかったが、例年9月に入ると増加する。8月末に、既に増加傾向の地域も見られる。 薬剤防除は、孵化直後の幼虫を対象に実施する。 今後の発生状況については、病害虫防除所のホームページを参照のこと（以下の害虫についても同様）。
コナジラミ類	並 (※)	－ (※)	並	<ul style="list-style-type: none"> 早期発見に努め、初期発生からの薬剤防除を徹底する。 施設内への成虫の飛び込みを防止するため、防虫ネットの目合いは0.4mm以下にする。 黄化葉巻病ウイルス（TYLCV）が媒介されるトマトについては、発生状況や防除に特に留意する。

※ 現調査地点での調査は前々年から実施しているので、現況は前年比で、予報の平年比はなし。





- 注) 1. オオタバコガの誘殺頭数は地域差が大きいため、縦軸の値はグラフによって異なる。
2. 飯塚市は前年から調査開始。



注) 8-6 はトラップ苗の不備により欠測。

農薬の安全・適正使用、飛散防止対策の徹底を！

福岡県では、農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理、使用現場における周辺への配慮を周知徹底するとともに、農薬による事故防止を目的として、安全使用講習会の開催や啓発チラシの配布等を関係機関、団体と一体となって取り組んでいます。

使用者の安全はもちろん、人畜・隣接作物・河川等への配慮について、ご指導をお願いします。

1 農薬適正使用の徹底

○適用作物、使用量や濃度、使用時期、総使用回数などが記載されたラベルをよく確認し、使用基準を遵守する。

※農薬の種類によっては、登録の内容がメーカーによって異なるので、ラベルをよく確認する。

(例：スミチオン水和剤40は、メーカーによって適用作物名や適用病害虫名が異なる)

○有効期限切れの農薬は使用せずに、産業廃棄物として処分する。

2 飛散防止対策の徹底

○風の弱い時に散布する。

○風向、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。

○飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフト低減ノズルを使用する。

○散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意する。

3 保護具の着用

○農薬の散布時には、ラベルの注意・警告マークをよく確認し、マスク、保護メガネ、ゴム手袋等を着用する。

4 農薬の散布後は、必ず散布器具を洗浄

○噴霧器、薬液タンク、ホースなどの散布器具を十分に洗浄する。

5 防除履歴の記帳

○農薬の散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、使用年月日、薬剤名、使用濃度、使用量等を正確に記帳する。

6 空容器の処分

○空容器は、産業廃棄物処理業者に委託するなど、適切な処分を行う。

また、野焼きは法令で禁止されているので行わない。

福岡県病害虫防除所ではQRコードを作成しました。

携帯電話のQRコードリーダーでスキャンして頂くと病害虫防除所ホームページに簡単にアクセスできますので、御利用下さい。



福岡県病害虫防除所